

朝鮮前期陶磁様式の展開における 製作技術と形式の変化

張起熏

I. 序論

朝鮮前期は、高麗末の陶磁器の伝統を受け継ぐ粉青沙器と白磁、明朝陶磁の影響を受けた新様式の硬質白磁と白胎青釉磁〔訳注：磁胎青磁〕が混在しながら、しだいに朝鮮王朝が追求した硬質白磁中心の陶磁様式が展開する時期である。あわせて制度的には「所」を主体とする手工業体制から、官営手工業と民営手工業が二元化し、定着をとげた過程にも相当する。

こうした一連の流れのなかで、朝鮮前期の陶磁様式は、官窯の設置、地方への白磁生産の広まり、技術発展などの段階的変化をとげていった。しかしながら、いまだにこれについての総合的かつ有機的な検討は進んでいない状況にあるが、それは朝鮮前期の陶磁研究が粉青沙器あるいは官窯白磁を中心に行われていたためとも言える。したがって本稿では朝鮮前期の陶磁様式の詳細な展開様相を、官窯と地方窯（民窯）との関係を通じて、特に製作技術と形式変化を中心に概観していくこととしたい。

そのため 1392 年から 17 世紀初までの朝鮮前期について、大きく①官窯設置以前、②官窯設置以後～16 世紀前半、③ 16 世紀後半～17 世紀初に三分する^(註1)。

II. 官窯設置以前

朝鮮開国初期の王室と官庁において所用された陶磁器は、全国各所の窯で焼造し、貢納された。1424 年から 1432 年の間の調査にもとづいた『世宗実録』「地理志」には、全国の磁器所 139 箇所と陶器所 185 箇所、計 324 箇所の陶磁器所が記されているが、全国に散在したこれらの陶磁器所から中央に陶磁器の貢納を開始した時期は、すでに高麗末からであった^(註2)。あわせてこのような形態は、朝鮮初期にも貢納された陶磁器に官司銘と匠人〔訳注：陶工〕銘を記させるなどの措置を強化しながら、しばらく継続された。^(註3)

少なくとも分院官窯が設置される以前までは、貢納による全国の陶磁器の主流は粉青沙器であった。現在の考古資料からは、およそ磁器所において粉青沙器が主に製作されていたことが明らかとなっているが、京畿道広州や慶尚道高嶺、全羅道南原、江原道楊口など一部の地域からは白磁も貢納されていた^(註4)。

当時の粉青沙器と白磁をつぶさに見ると、およそ 15 世紀前半の陶磁は高麗系陶磁の伝統が続くな

ちゃん・きふん：(京畿陶磁博物館 館長)

か、京畿道広州を中心とした新しい白磁と青磁の様式が急激に広まったと推測される。この時期の代表的な粉青沙器の窯としては「光山」銘片が出土した光州忠孝洞窯跡 W2 地域 8 層^(註5)、「蔚山仁寿府」、「慶州長興庫」などの銘文片が出土した釜山機張上長安窯跡^(註6)、「内資執用」銘片が出土した大田旧完洞窯跡^(註7)、「司膳」銘片が出土した慶尚北道尚州上板里窯跡、「内贍」銘片が出土した全羅北道完州花心里窯跡や全羅南道谷城龜成里窯跡^(註8)などを例として挙げるができる。

発掘調査において確認されたこれらの窯は、すべて傾斜面に造成された長い単室登窯（龍窯）であり、およそ窯長 25m 前後、内壁幅 1.2～1.6m 前後である。側面の出入口を基準とすれば焼成室とは分けて使用した痕跡があるが、各部屋を区画する構造物はほとんど発見されていない。

これらの窯から出土した象嵌粉青や印花粉青は、およそ口縁内湾鉢、口縁端反鉢、皿などで、高台を竹節形に削り出し、全面、あるいは高台を除いた全面に施釉しており、光州忠孝洞のような一部の窯跡では、円筒形、孔をうがった鉢形匣鉢も使用しているが、およそは匣鉢を用いず、3個から5個の胎土目をあて、背の高い円筒形トチンの上に置き、重焼きしていることが特徴である^(註9)。概ねこのような形式と技術的な特徴は、高麗末の漕運の途絶によって康津と扶安の窯業が瓦解し、工人集団が全国に散らばることにより、継承されたものであろう。

同じ頃に運営されたとみられる白磁窯としては「礼賓寺」、「恭安府」銘片が出土した江原道楊口方山面の松峴里 5 号・7 号窯跡、「長」銘片が出土した金岳里 1 号・2 号窯跡^(註10)、「内用」、「司」銘片が出土した京畿道広州牛山里 2 号・17 号窯跡や建業里 2 号窯跡が挙げられる^(註11)。金剛山月出峰で発見された「洪武 24 年（1391）銘白磁舍利器」の製作地と考えられる楊口方山洞窯跡の白磁は、やや粗い胎土に淡緑色の灰釉系の釉薬をほどこすことが特徴で、大鉢や鉢の形態は粉青沙器に近く、高台もやはり胎土目をあてて焼成している。しかしながら広州地域の白磁は、粉青沙器とは異なる新しい形式を帯びており注目される。

広州牛山里窯跡と建業里窯跡から出土した白磁は、鉢や皿の見込み中央に円刻をなし〔訳注：いわゆる鏡面のこと〕、およそ胴の器壁が S 字状を描きながら口縁が端反る型式をとる。円筒形匣鉢を用い、高台を逆三角形に削り出し、全面施釉した後に細かな砂を敷いて焼成し、粗質白磁は竹節高台に胎土目をあて、背の高い円筒形トチンの上に置いて焼成した。また、同様の形式の青磁も発見されたが、この青磁は白土の上に青磁釉を施したもので、形態や技法において高麗青磁とは差がある。いっぽう牛山里窯跡や建業里窯跡は、その窯構造が粉青沙器の窯と似ているが、各焼成室間に石やトチンを重ねて作った分焰柱を置いた痕跡を特徴とする。

このように 15 世紀前半にみられる新しい白磁と青磁の技術源流はまだ明らかになっていないが、『朝鮮王朝実録』には世宗（1418—1450）から成宗年間（1469—1494）にかけて、明朝の白磁と青磁が明使や日本国、琉球国使節などによって朝鮮へ続いてもたらされたことが記されており、当時、紹介された中国陶磁が朝鮮陶磁の受容の拡大と形式変化に少なくない影響を及ぼしたと考えられよう。^(註12)

以上を整理すると、分院設置以前の陶磁器の様相はその系統と地域によって少しずつ差があったが、およそ高麗系の粉青沙器と軟質白磁が主流を占めるなかで、新様式の青磁（白胎青釉磁）と硬質白磁が広州を中心として成長をとげたと言える。興味深い点は、様式系統間に原料と造形形式の差はあるものの、粉青沙器と新様式の白磁では匣鉢型式が異なっているほかは、焼成手法において

は著しい差が見られないということである。例えば、良質白磁と粉青沙器は、逆三角形高台をなし、全面施釉した後、匣鉢に入れて砂を敷いて焼成されている。あわせて大部分を占める粗質の粉青沙器と白磁は、竹節高台に胎土目をあてて重焼きをしたが、トチンは背の高い円筒形である。このような方式は高麗末青磁に始まり、朝鮮前期の陶磁様式の形成において外来技術の流入はきわめて弱かったことを思わせるものとなっている。

Ⅲ．官窯設置以後～16世紀前半

前述したように、朝鮮においては世宗年間（1418－1451）を前後して明朝白磁に対する関心と需要が生じ、広州一帯では新しい形式の白磁も生産されていた。つづく1467年頃、朝鮮王室は官庁や宮中において使用する高級白磁を直接に生産するために、京畿道広州に官窯である司饗院分院を設置した。^{（註13）}

分院は以前から良質白磁を生産した京畿道広州に設置され、6面にまたがる柴場〔訳注：燃料となる樹木のある場所〕の内部を移動しつつ運営が行われたが、地理的に漢陽〔訳注：現ソウル〕から近く、漢江を利用した運送に便が良いのみならず燃料も豊かであり、官窯を運営するのに適していたためである。また全国の主要な白土産地から原料の供給を受けてだけでなく、全国の沙器匠〔訳注：陶工〕1,140名を3班に分け、1班につき380名を分院に集め、賦役を課して白磁を作るように法を定めた^{（註14）}。司饗院は、毎年、春・秋の二回ずつ燔造官を派遣し、器の製造を監督した。

この時期の分院の窯跡は、広州一帯で多数が発掘調査されたが、年代を推定できる窯は「奉先」「太一殿」「英」銘とともに墓誌片が出土し、1470年代の分院初期の窯跡と考えられる牛山里4号窯跡、「壬寅（1542）」銘の陰刻墓誌片が出土した牛山里9号窯跡^{（註15）}、「乙丑（1505）」銘の土棒が出土した道馬里1号窯跡^{（註16）}、それぞれ「嘉靖三十三年（1554）」と「嘉靖壬子（1552）」年銘の陰刻墓誌が出土した樊川里5号と9号窯跡などである^{（註17）}。

なかでも窯体が発見された牛山里9号窯跡と樊川里5号・9号窯跡は、窯長26m前後で以前の時期と似ているが、内壁幅が最大2.2mと拡幅していることが特徴である。また、窯内の分焰柱が石や匣鉢などをいくつか重ねて作られるように定型化し、構造的な変化を示唆している。これはトチンが背の高い円筒形から円盤形へと低くなったことと無関係ではなく、窯内の焰の循環がより効率的に改善され、窯床まで高温に達することができたことを思わせる。

これら分院の窯跡で出土した白磁は、大きくは匣鉢を使用し、単独で細かな砂を用いて焼かれた逆三角形高台の良質白磁と、竹節高台に胎土目をういて重焼きした粗質白磁に区分されるが、良質白磁では、およそ1560年代までは焼成前に高台の裏面の釉上から陰刻した「天」「地」「玄」「黄」銘文片が発見された。^{（註18）}鉢や盞、皿など、白磁の食膳器は、およそ口縁が端反り、見込に円刻を設ける。また、白磁のような形式の白胎青釉磁や祭器など、一部の器種において少量の粉青系統が製作された。この点は、分院設置以前の広州地域の窯跡に見られた特徴がそのまま続いていたことを示している。ただし以前との違いとしては、良質と粗質の区分が明確であり、青花を含む良質白磁の生産が集中的に増加したという事実である。

いっぽう分院が設置された直後の15世紀末、地方の粉青沙器の生産は甚だしく萎縮していたものとみられる。これは『世宗実録』「地理誌」に全国の陶磁器所が総計324箇所と記されているのに比べ、1478年から1486年に作成され、1530年に増補された『新增東国輿地勝覧』では、磁器・沙器・陶器所を合わせて総計49箇所のみが記されていることから斟酌することができる。^(註19) 朝鮮前期の分院は全国から出役した地方の沙器匠らによって運営されていたことから、分院設置以後、地方の窯業が萎縮することは当然の結果だといえよう。しかし、減少した窯はおよそ粉青沙器の窯と見られ、地方における白磁生産はむしろ増加しつつあったのであろう。^(註20)

中宗年間(1506-1544)には、陶磁器生産の乏しかった平安道、咸鏡道など六鎮の官吏らが広州の白磁を求めに赴くほど、全国の白磁需要が高まっていた。^(註21) したがって、15世紀末からは分院白磁に刺激を受けた各地方でも粉青沙器窯が白磁窯へと転換したり、新しい白磁窯が出現したりするなど、全国的に白磁の生産が広まったものとみられる。

したがって発掘調査された朝鮮前期の地方白磁窯跡のなかでも、粉青沙器系統が残存している窯が主にこの時期に相当するものであろう。^(註22) 代表的な地方窯としては、1510年代まで続いた光州忠孝洞窯跡遺跡 W2 地域3層^(註23)、やはり粉青沙器から白磁への移行を示す山清放牧里窯跡や安東新陽里窯跡^(註24)、高敞龍山里窯跡^(註25)、釜山機張下長安窯跡^(註26)、白磁専用窯と考えられる軍浦山本洞窯跡や龍仁草苺里窯跡遺跡などがある^(註27)。

これらの窯跡は、およそ窯の内壁幅が1.4～2.4mと拡大し、2本ほどの分焰柱で各焼成屋を区画していることが特徴であるが、一部の分焰柱は天井を支える窯柱の役割を果たしており、単室ではなく、分室登窯へと転換が行われたとみられる。^(註28) とりわけ高敞龍山里窯跡では、各焼成屋が階段式に段をなして連なる点が注目される。

出土した粉青沙器と白磁は、およそ分院の粗質白磁に似ており、竹節高台で口縁が端反り、見込に円刻をつくる鉢や皿、盞が主流をなす。ただし製品の器壁が斜状に広がり、支えは胎土目(山本洞窯跡)以外に練耐火土目(放牧里)、耐火土目(忠孝洞、龍山里)、耐火土混じりの砂目(新陽里、下長安)などへ変化し、同様の窯詰め技法の白磁が共伴出土する。高麗末からつづく胎土目積みは高さがあるため不安定であり、これをはずす際に底を多く毀損するという短所があるため、地域ごとに適した方式でこれを代替した。しかし、耐火土目積みや砂粒を用いる目積みは、重ねた器の間隔を高くすることができないため、器壁も次第に低い斜状に変化したのであろう。

IV. 16世紀後半～17世紀初：壬辰倭乱前後

粉青沙器が消滅する16世紀末には、白磁においても少しずつであるが新しい変化が起こる。およそ明宗(1545-1567)から宣祖(1567-1608)年間までは、私貿易と密貿易によって対明貿易が混乱するようになり、以前からあった官匠の離脱とこれを含めた官窯制度の崩壊が続き、白磁の生産は少しずつ悪化したとみられる^(註29)。それとともに、倭銅の輸入減少により金属器が不足するなどの一連の現象は、16世紀後半には白磁の需要が依然として高くなるほかに重要な要因として注目される。このような状況は地方においてさらに深刻であったと見られ、壬辰倭乱以降はさらに強まっていった。^(註30)

この時期にあたる分院窯跡では、良質白磁の高台裏面に「左」「右」「別」銘が単独で釉上から陰刻されたものが発見されているが^(註31)、現在わかっている遺跡としては大雙嶺里1号、武甲里10号・11号、昆池岩里1号・2号、観音里4号・5号・11号、亭支里3号などがある^(註32)。「左」「右」銘は、干支銘、数字などと組み合わせられ、17世紀まで持続的に使用された。

上記の窯跡のなかで発掘された資料は多くないが、「隆慶六(1572)」銘青花墓誌が発見された昆池岩里1号窯跡が代表的である^(註33)。また、窯跡は発見されなかったが、円筒形匣鉢、円盤形トチンとともに出土した白磁のなかで、円形高台に胎土目を用いて重焼きした粗質白磁は、高台が以前より低く、裏面は丸く窪んだ状態に削られ、アーチ状をなす高台〔訳注：以下、内湾高台とする〕に近しく、注目される。いわゆる典型的な内湾高台は、分院において17世紀に至るまで流行した様式であるが、その前兆を示すこのような様式は、16世紀末に比定される広州亭支里窯跡でも採集されたことがある^(註34)。

このように、裏面のみをアーチ状とする竹節高台に、胎土目、あるいは砂目を用いる習慣は、広州分院において17世紀初の炭筏里窯跡(1608-1612年前後)、鶴東里窯跡(1613-1617年前後)まで続き、典型的な内湾高台に砂をあてて重焼きした粗質白磁は、1628年頃から1638年頃まで運営されたとみられる祥林里窯跡から本格的に登場する^(註35)。

同時期に運営された地方窯のうち、発掘調査のなされた代表的な窯跡としては、大田政生洞窯跡^(註36)、全羅南道長城大都里窯跡・同道康津月下里窯跡^(註37)、慶尚北道尚州好音里窯跡^(註38)が挙げられる。16世紀後半、おそくとも17世紀初を運営の下限とするこれらの白磁窯は完全な分室構造を備えており、各室の間は2本から4本ほどの柱が天井を支え、各焼成室を区分することによって連室式登窯に移行した姿をとる。わけても尚州好音里4号窯と長城大都里窯は、焼成室の床が傾斜した段をなしつつ、分焰柱は4本ほど低く設置され、以前に比べて各室の区分が明らかであり、生産効率もまた非常に高まったことがわかる。

これら窯跡から出土した白磁はすべて見込に円刻を設け、口縁が端反る朝鮮前期の型式の鉢と皿が主流である。ただし、一部に内湾皿が登場し、高台は竹節高台のほかに、内湾高台がともに発見される点が以前とは異なる特徴である。特に16世紀後半と推定される大田政生洞白磁窯跡では、素焼きをせずに竹節高台またはアーチ状高台に粗い砂を敷いて重焼きした白磁が発見されたが、これと同じ窯詰め技法は、17世紀に至って全国に広く流行する傾向であって、確認された白磁の中で最も早い例である。これは16世紀まで続く公州鶴峰里窯跡の粉青沙器の製作技法から影響を受けたものであろう。^(註39)

V. おわりに

いまだその編年を明確に確定するには時期尚早の感が無いわけではないが、朝鮮前期をおよそ3段階に分け、その様式展開様相を考察した結果、次のように整理することができよう。〈表1参照〉

①官窯設置以前の時期には、見込に円刻の無い高麗系の粉青沙器と円刻をつくり口縁が端反る新様式系の白磁が共存しているが、すべての窯が窯幅の狭い単室登窯であり、匣鉢や円筒形トチンを

用いて焼成した。特に重焼きした粉青と白磁は、すべて竹節高台に胎土目をあてていることが特徴である。

②官窯設置以後～16世紀前半までは、官窯の設置によって貢納用であった粉青沙器が消え、白磁生産が広まった時期である。この時代に官窯においては伝統的に逆三角形高台に砂を敷き匣鉢に入れて焼成した良質白磁と、竹節高台に胎土目をあてて重焼きした粗質白磁が定着したが、地方窯の場合は粉青沙器から白磁へ移行する過程において、粗質白磁に各種の耐火土目や練砂目をあてて焼成する地域性が顕著となる。これによって鉢や皿の形態、または重焼きを容易にするために器高が低く、器壁が斜状に広がる形態を示している。窯跡は前段階で往々にして見られた1本から2本の分焰柱が天井を支える窯柱となり、焼成室ごとに段が生じるなど構造的に発展をとげ、熱効率が高まり、トチンも円筒形から円盤形へと低くなったことがわかる。

③16世紀後半～17世紀初には、分焰柱が2～4本に増加することにより、連室式登窯の構造を備えるようになったことを特徴とする。分院では、粗質白磁の場合、竹節高台の高台裏面を丸く窪ませて削る変化がみられる反面、地方白磁では竹節高台と内湾高台が混在しつつ、次第に内湾状高台と砂目積みが増加する方向へと移行していった。

以上のような結果は、朝鮮初に地方を拠点とした高麗系の粉青沙器の製作技術が、時間経過につれて白磁の生産に継承されつつ、白磁の広まりと朝鮮前期の陶磁様式の形成と展開に影響を与えたことを示すものである。いっぽうで内湾高台や窯構造の変化のように大量生産に有利な技術は、まず地方から提起されたと推測することもできよう。これらの事例については、今後の持続的な調査と研究を通じて、より深まりをとげることを期待したい。

<表1> 朝鮮前期の陶磁様式の展開

		官窯設置以前	官窯設置以後～16世紀前半	16世紀後半～17世紀初
高麗系	粉青沙器			
	地方白磁			
新様式系	廣州白磁			
	地方白磁			
常備	高台	竹節高台	竹節高台, 逆三角形	竹節高台, 内湾高台
	目跡	胎土目	胎土目, 耐火土目, 砂粒	胎土目, 耐火土目, 砂粒
	陶枕			
窯構造				

註

- 1) 朝鮮陶磁史において、朝鮮前期は研究者ごとに少しずつ異なる編年が行われている。鄭良謨は 1392～1649 年、姜敬淑は 1392-1600 年、尹龍二は 1392-1550 年とみているが、筆者は 17 世紀朝鮮中期の様式が始まった時点について、祥林里窯跡の運営時期（1628-1636 年前後）である 1620 年代後半頃とみる。
- 2) 『高麗史節要』34 恭讓王 1 年 12 月条
- 3) 『太宗実録』13 年 7 月 16 日、17 年 4 月 20 日、『世宗実録』世宗 3 年 4 月 16 日条
- 4) 成倪（1439-1504）『慵齋叢話』卷 10
「人之所用陶器最緊、今麻浦露梁等處、皆陶埴爲業、此皆瓦器缸甕之類、至如磁器、順用白土精緻燔造、然後可中於用、外方各道多有造之者、惟高靈所造最精、然不若廣州之尤爲精也…」
金宗直（1431-1492）『佔畢齋集』「彝尊錄」下「高靈歲貢白砂器…遂教其下九篩之法、精緻鮮潔、居廣州南原之右先是」
梨花女子大学校博物館・楊口郡『楊口方山의 (の) 陶窯址 - 地表調査報告書』(2001) .
- 5) 国立光州博物館、光州直轄市、『무등산 충효동 가마터 (無等山忠孝洞窯跡)』(1993) pp. 157-158
- 6) 釜山博物館・釜山広域市機張郡『機張上長安遺跡』(2011)
- 7) 大田広域市・海剛陶磁美術館・湖巖美術館『대전 구완동 상감청자가마터 발굴조사 지도위원회 회의자료 (太田旧完洞象嵌青磁窯跡発掘調査指導委員会会議資料)』(1996)
- 8) 全北文化財研究院・榑オッケイ『완주 화심리 유적 - 완주 오케이골프장 조성부지내 문화유적 발굴조사 (完州花心里遺跡 - 原州オッケイゴルフ場調査敷地内文化財発掘調査)』(2008)、全南文化財研究院『곡성 구성리 도요지 (谷城龜成里陶窯跡)』(2005)
- 9) 例外的に公州鶴峰里窯跡の印花粉青沙器は、砂を敷いて重焼きを行った。
- 10) 梨花女子大学校博物館・楊口郡（2001）前掲書、楊口郡・翰林大学校博物館『文化遺蹟分布地圖 - 楊口郡 - 』(2008)、楊口白磁博物館・江原大学校人文科学研究所古文書研究センター『양구백자・백토 학술자료집 (楊口白磁・白土學術資料)』(2012)
- 11) 海剛陶磁美術館『廣州 牛山里 白磁窯址』(1995)・『廣州 牛山里 白磁窯址 (II)』(1999)・『廣州 建業里 白磁窯址』(2000)
- 12) 『朝鮮王朝實錄』に記された明からの青磁と白磁の流入は、太宗 17 年（1417）7 月 21 日、世宗 10 年（1428）7 月 19 日、11 年（1429）1 月 27 日、5 月 2 日、11 月 2 日、12 年（1430）7 月 17 日、文宗元年（1450）8 月 5 日条、日本や琉球からの青磁や白磁の流入については世宗 1 年（1419）8 月 14 日、5 年（1423）9 月 24 日、10 月 15 日、13 年（1431）11 月 14 日、文宗 元年（1450）10 月 7 日、成宗 5 年（1474）12 月 24 日、8 年（1477）6 月 6 日、11 年（1480）6 月 7 日、25 年（1494）5 月 11 日条を参照のこと。
- 13) 朝鮮官窯の設置時点についての様々な見解のうち、妥当性のあるものは金英媛の見解であり、『朝鮮前期 陶磁의 (の) 研究』(學研文化社、1995)において、司饗房が 司饗院に改称した 1467 年から『慶尚道續纂地理誌』編纂（1469 年正月）以前の 1468 年の間に設置されたとする。いっぽうで田勝昌は「京畿道 廣州 官窯의 (の) 設置時期와 (と) 燔造官」(『미술사연구 (美術史研究)』第 22 号（2008）)において公私間の白磁使用と城槌の盗用を禁止した 1466 年 6 月を官窯の設置上限とみるべきとした。
- 14) 『経国大典』では司饗院所属の沙器匠定員が 380 名と明記されており、『承政院日記』仁祖 3 年 7 月 2 日条には法典内に規定された戸奉足が 1,140 名とされている。

- 15) 梨花女子大学博物館『朝鮮白磁窯址 發掘調査報告書 - 附 牛山里 9호 窯址 發掘調査報告 -』(1993)、牛山里 4号は 2015年に京畿陶磁博物館で發掘調査を行ったが、報告書は未刊である。
- 16) 国立中央博物館『廣州郡 道馬里 白磁窯址 發掘調査 報告書』(1995)
- 17) 梨花女子大学校博物館『廣州 朝鮮白磁窯址 發掘調査報告書 - 樊川里 5號・仙東里 2,3號 -』(1986)・『廣州 上樊川里 9號 朝鮮白磁窯址 發掘調査報告書』(2007)
- 18) 김경중 (キム・ギョンジュン) 「16세기 중· 후반 조선관요 운영시기 및 제작양상 연구 (16世紀中・後半朝鮮官窯運營時期ならびに製作様相研究)」『아외고고학 (野外考古学)』第15号 (2012), pp. 244-265
- 19) 『新增東国輿地勝覽』には全国の磁器所 32箇所、沙器所 4箇所、陶器所 13箇所が記録されている。
- 20) 拙稿「分院과(と) 地方白磁의(の) 關係試考」朝鮮官窯博物館『第2回 朝鮮官窯學術세미나(セミナー)』(2003. 10)
- 21) 『中宗実録』4年正月27日、23年2月6日、32年12月19日、33年8月18日条
- 22) 姜景仁・張起熏・片山まび・權素玄「朝鮮時代の軟質白磁に関する基礎研究」『東洋陶磁』Vo1. 35 (東洋陶磁学会 2006) pp. 65-95
- 23) 国立光州博物館・光州直轄市、前掲報告書 (1993) pp. 157-158
- 24) 釜山大学校博物館『山淸 放牧里 白磁窯址』(2000)
慶南大学校博物館『대구 - 춘천간 고속도로건설예정지역내 문화유적 발굴조사보고서 (균위 - 안동간) (大邱—春川間高速道路建設予定地域内文化遺跡發掘調査報告書 (軍威—安東間)』(1992)
- 25) 湖南文化財研究院『高敞 龍山里 窯址』(2004)
- 26) 釜山博物館・株釜山サンゴン産業団地開發『機張 下長安遺蹟』(2013)
- 27) 湖巖美術館「陶窯址遺蹟」、明知大学校博物館・湖巖美術館・京畿道『山本地區 文化遺蹟 發掘調査 報告書』(1990) pp. 211-317
明知大学校博物館・龍仁市『용인 초부리 백자가마 발굴조사 보고서 (龍仁草英里白磁窯發掘調査)』(2009)
- 28) 拙稿「朝鮮時代における粉青沙器窯と白磁窯について」『李朝陶磁の名品』(佐川美術館 2006) pp. 16-21
- 29) 金英媛『朝鮮 前期 陶磁史』(一潮閣 2011) pp. 209-214
- 30) 本田(片山)まび『壬辰倭亂 前後의(の) 韓日 陶磁 比較研究 - 日本 九州 肥前陶磁와의(との) 比較를(を) 중심으로 (中心として) -』(ソウル大学校博士学位論文 2003) pp. 42-122
- 31) 「天」「地」「玄」「黃」銘から「左」「右」銘に轉換する時期は1560年代とされている。(キム・ギョンジュン、前掲論文 (2012) pp. 244-265)
- 32) 国立中央博物館・京畿道博物館『京畿道廣州中央官窯』解説篇 (2000) p. 335
- 33) 한국문화유산연구원 (韓國文化遺産研究院) 『광주 실촌읍 곤지암리 492번지 근린생활시부지 내 유적 시굴조사 - 지도위원회 자료 - (廣州実村邑昆池岩里 492番地近隣生活施設敷地内遺跡試掘調査—指導委員會資料—』(2009. 07. 06)
- 34) 国立中央博物館・京畿道博物館『京畿道廣州中央官窯』図版篇 (1998) pp. 67-69
- 35) 拙稿「朝鮮 17世紀 前半 分院의(の) 白磁様式 變化」『美術史學研究』224號 (1999. 12) pp. 89-121。いっぽうで内湾高台の源流については本田(片山)まびは、16世紀中葉頃の明代の粗質の青花を中心に饅頭心碗が普遍化することを根拠に、朝鮮白磁の内湾高台は明代の饅頭心を模倣した可能性を提示している。(本田まび、前掲論文 (2003) 参照)

- 36) 1997年に海剛陶磁美術館において発掘調査を行ったが、報告書は未刊である。
- 37) 목포대학교박물관・장성군 (木浦大学校博物館・長城郡) 『장성 대도리 가마유적 (長城大都里窯跡)』(1995)、
호남문화재연구원 (湖南文化財研究院) 『康津 月下里遺蹟』(2009)
- 38) ㈜동승레저·(사) 대경문화재연구원 (株)ドンスンレジャー·(社)大京文化財研究院 『尚州 好音里 遺蹟 가마터 (窯跡)』(2009)
- 39) 拙稿、前掲論文 (2003.10)

翻訳・校閲者付記

シンポジウム当日の資料の翻訳について神谷智昭准教授(琉球大学)が翻訳し、専門用語を含む原稿の内容について、シンポジウム司会の池田榮史教授(琉球大学)の意見を反映させて、成文化した。この発表原稿をもとに張起熏館長が追加修正を加え、片山まび(東京藝術大学)が全体の翻訳と修正を行った。韓国語の書名と論文名については、原典を参照できるように原文を掲載し、日本語訳を加えた。朝鮮時代の文献については、書名のみ現代表記に書き換え、原文については旧字体を用いた。